いしずえ

恵那北中学校　学校だより　第 259 号
発行：令和4年12月20日（火）

◇「いしずえ」の名称は，校歌の一節「学ぶことそれは礎」から生涯学習の基礎を学ぶ生徒達の心と体の成長を願ってつけました。
◇NOは創刊号以来の通番でつけております。

ブラボー！！

校長　可知 浩幸

アルゼンチンの優勝で約１ヶ月間の感動の幕を閉じたワールドカップ2022、“死の組”と言われたEグループの日本は、格上のドイツ、スペインに逆転勝ちして、試合が終わったピッチには、「ブラボー、ブラボー！」の雄叫びが飛び交っていました。残念ながらクロアチアにPK戦の末敗れてしまいましたが、私たちは大きな感動を選手達からもらいました。そんなワールドカップ開催期間中、恵那北中学校では全校が一丸となって駅伝大会に取り組んでいました。

10 月のPTA本部役員会の席で、「駅伝大会で本当に一生懸命がんばる子どもたちのために何かできることはないか」が話題にあがりました。過去には、母親委員さん達が調理室で豚汁を作って、ゴールしてきた子どもたちに振る舞った駅伝大会もあったそうですが、作っているお母さん達は、肝心の駅伝を走る子どもたちの姿を見ることができないという難点がありました。「子どもが喜ぶ、大人も楽しめる、駅伝大会が楽しくなる」何か…、どこからともなく「焼き芋」というワードが飛び出してきました。「焼き芋、いいねえ！」と会議室に笑顔が広がった瞬間でした。

そうと決まれば、あとは当日に向けて粛々と準備を進めるだけです。ここでは、教頭先生が大活躍でした。大量の薪を確保するため、トラックを借りてきて地域へ木っ端集めに出かけてくれました。大量の籾殻も手に入れました。校務員の長谷部さんには、校庭に降り積もる落ち葉を毎日毎日かき集めていただきました。問題は、サツマイモです。農協に問い合わせても、130 本という大量のサツマイモは手に入りませんでした。しかし、本当にネット社会は便利です。簡単に大量の“紅はるか”をネットで注文することができました。前日には、焼き芋ボランティアの方々に来ていただき、紅はるかを洗って、濡れた新聞紙でくるんでからアルミホイルで包んでもらいました。

いよいよ駅伝大会当日です。朝から雪がちらつくとても寒い日になりましたが、この時「焼き芋」は大正解だと確信しました。朝の 7 時から熾（おき）火づくりを始めましたが、全然寒くないのです。いや、顔が焼けるほど熱いくらいでした。駅伝大会の号砲が鳴るころには、ちょうどいい熾火が出来上がり、大量の紅はるかを投入しました。予定では、生徒達が全員ゴールする頃にはおいしい焼き芋が出来上がるはずでしたが、火加減が難しく、予定の時間になっても芋は硬いままでした。しかし、運動場の片隅に大勢の焼き芋ボランティアが集まり大奮闘、閉会式が終わるころには、蜜が染み出て甘くてホクホクの焼き芋が完成しました。

7班の優勝で幕を閉じた駅伝大会、生徒は、1kmから3kmの区間を、タスキを繋いで走りきり、生徒会が中心に生徒全員が当事者意識をもって駅伝大会を楽しむことが出来ました。誰一人として置き去りにすることなく、会場全体が一体となって応援の声、歓声が響き渡りました。そして、みんなで焚火の周りを取り囲んで、甘い甘い焼き芋をニコニコの笑顔でほおばりました。「ブラボー！！」